

【海外出張報告】

日本文化としての神道発信
— イスラエルのエルサレム・ヘブライ大学訪問記 —

瓜 田 理 子

Promoting Cultural and Academic Exchange through Shinto:
Report on Visit to the Hebrew University of Jerusalem, Israel

Michiko URITA

皇學館大学現代日本社会学部
日本学論叢 第13号

令和5年3月

日本文化としての神道発信 — イスラエルのエルサレム・ヘブライ大学訪問記 —

瓜 田 理 子

抄録 ●

令和2年2月に日本でも新型コロナウイルス感染症が感染拡大し、本学では教員の海外渡航は長らく中断していた。令和4年（2022）6月に、エルサレム・ヘブライ大学人文科学部ニシム・オトマズギン（Nissim Otmazgin）学部長の招聘によりイスラエルを訪問した。神楽秘曲についてのゲスト・レクチャーを行い、日本とイスラエルの外交関係樹立70周年奉祝儀礼の進行役を務めた。奉祝儀礼は、東京にある用賀神社宮司・三宅勝正氏（皇學館大学神道専攻科29期）が執り行い、人長舞のパフォーマンスも行った。その目的は、日本文化の根幹にある神道を体験してもらい、異文化相互の理解を深めることにあった。

本稿は、世界の三大宗教の聖地であるエルサレムにあるヘブライ大学で、神道儀礼のデモンストレーションを行った際に、どのような局面に遭遇し、どう対応したのか、宗教文化に関わる文化交流で留意すべき点とは何かについて報告する。

Keywords：日・イスラエル外交関係樹立70周年（2022年） エルサレム・ヘブライ大学 神道儀礼 神楽秘曲

「神道儀礼のデモンストレーションを見学しました。場所は大学の図書館の中だったので、多くの人が行き交い、雑音もあり、落ち着かない空間でした。ところが、始まって数分もしないうちに、神職さんのデモンストレーションがその世俗的な空間を真っ当なものに変えたのです。ものの数分で、全てが静寂となりました。神職さんがそこに存在することで、空間と時間に変容し始めたのです。感じたのは、全く違う世界、場所にいるかの

ようでした。それは神職さんの神道儀礼のおかげ、存在そのもののおかげです。本当にありがとうございました」

イスラエル人女性舞踏家アイリス・サムラ 令和4年6月21日 ヘブライ大学にて

令和4年(2022)6月17日から23日の間、エルサレム・ヘブライ大学人文科学部ニシム・オトマズギン(Nissim Otmazgin)学部長の招聘によりイスラエルを訪問した。令和のご大礼ならびに神楽秘曲についてのゲスト・レクチャーを行い、日本とイスラエルの外交関係樹立70周年奉祝儀礼の進行役を務めた。奉祝儀礼は、20日に東京にある用賀神社宮司・三宅勝正氏(皇學館大学神道専攻科29期)が執り行い、21日午前に私のレクチャーがあり、午後には三宅氏による人長舞のパフォーマンスが行われた。その目的は、日本文化の根幹にある神道儀礼を体験してもらい、異文化相互の理解を深めることにあった。

以下、イスラエルへの渡航準備の過程の舞台裏で起きたこと、また現地での体験したのかを報告する。民族音楽研究においては、文化人類学と同様に、データ収集の方法の中心は異なる文化への参与観察であり、フィールドワーカー自らの体験こそが研究データとなる。短期間であっても、イスラエルにおいて、神道文化を発信する貴重なチャンスを得たことを機に、民族音楽を研究する者として直面した課題とそれにどう対応したのかを伝え、今後、海外への神道文化発信に資することができれば幸いである。

1 発端：カナダではなくイスラエルへ

2022年3月は、コロナ禍のため2年延期となっていた国際シンポジウム「日本の儀礼の色彩と響き」が、カナダのモントリオールにあるマギル大学にて開催される予定であった。2021年12月も半ばが過ぎ、開催延期の知らせが届いたのは、シンポジウムでの発表と、神道儀礼のデモンストレーションの準備を進めていた矢先であった。マギル大学の主催者によれば、ケベック州でコロナの感染拡大が再び起き、外国人の受け入れが制限され、国際シンポジウムは開催不可能となり、3度目の延期となってしまった。

海外での文化発信を諦めていたが、2022年4月に入り、それまで検疫が厳し

かったイスラエルが、3月から外国人の入国を再開、2022年は日本とイスラエルの外交関係樹立70周年であることを知った。そもそも私は、イスラエルと繋がりがある。2019年2月から3月にかけて、エルサレムのヘブライ大学で「明治天皇が神道存続のために果たした役割」という題目で講演を行い、三宅勝正氏による神道儀礼デモンストレーションの進行役を務めた。続いてテルアビブに移動し、テルアビブ大学において、「御神楽の儀と神楽秘曲」の講演を行い、神道儀礼のデモンストレーションの進行役を務めた。「デモンストレーション」と称したのは、ユダヤ教・キリスト教・イスラーム教の世界三大宗教の聖地エルサレムのあるイスラエルで、異国の宗教行事を行うことから生じ得る緊張を回避し、学術交流というコンテクストを強調するための措置であった。この神道儀礼の「デモンストレーション」は、日本文化の紹介として大変好意的に受け入れられた。それはヘブライ大学側のホスト、ニシム・オトマズギン氏がネット上のAERAdot.に、「エルサレムに神道がやってきた」というタイトルのエッセイを掲載し、エルサレムにおいて神職による儀礼が初めて行われたインパクトを肯定的に書いたことから窺える¹⁾。また、両大学での講演の後、イスラエルの学生や一般の方々から、皇室および伊勢神宮について数多くの質問が寄せられた。こうした日本への深い関心に私は新鮮な驚きを感じ、再訪を約して彼の地を後にした。翌年2020年の夏、相互交流としてオトマズギン氏がサバティカルで来日を予定されていたため、秋学期に現代日本社会学部主催の現日塾に講師として来ていただくことを要請、快諾を得てポスターも作成した。しかし、全てがコロナ禍のため中断となってしまった。

このような経緯があって、2022年5月、オトマズギン氏にカナダの国際シンポジウムが延期になったことを伝えたところ、是非ヘブライ大学で、ゲスト・レクチャーと神道のお祓い行事を、また行って欲しいと依頼する招聘状が届いたのであった。当初春学期後の夏休みに行く予定であったが、ヘブライ大学の夏休みと重なってしまい、多くの学生や教職員、一般の方々も参加できる時期をとの要望に応え、6月17日から23日まで、つまり春学期の9週目から10週目にかけて、イスラエルを訪問することになった。

2 祝詞の御祭神問題と儀礼のコンテクスト

出立までの日数が限られているが、三宅氏からエルサレム・ヘブライ大学で奏上する祝詞について、盛り込みたい内容を考えてみてはと言われた。それを最終的に三宅氏が祝詞特有の宣命体に整え、仕上げるという。2019年の祝詞は、皇學館大学図書館所蔵の祝詞関連書籍を参照し、海外で奏上された祝詞や世界平和を願う祝詞の例を参照して、下書きを作成した。その時の願意は、イスラエルの民の何千年にも及ぶ流謫辛苦の歴史と、エルサレムにおける宗教対立を踏まえ、世界平和を祈る内容であった。

同様の内容を、今回の祝詞作文には部分的にでも取り込むことにした。祝詞には一定の構造がある。御祭神を褒め称える文言、祭祀を行う場所と主旨、その由緒、祭祀で神前に捧げる神饌や舞の内容、そして願意と感謝の言葉となる。問題は祝詞の対象となる御祭神である。イスラエルの準備ノートから祝詞のメモを転載し、振り返る。

令和4年5月15日（日）イスラエル神事

目的

- ・日本とイスラエル外交関係樹立70周年奉祝神事
- ・日本とイスラエルの友好発展
- ・ヘブライ大学と教職員・学生・関係者一同の安寧・発展
- ・コロナの収束
- ・イスラエルの安寧と発展
- ・エルサレムの地の共存・共栄・平和
- ・エルサレムの聖地としての平和的継続
- ・世界平和

ノートには続いて、「1 発端文、2 由縁・神徳文、3 感謝文、4 目的文（祭祀の主旨）、5 献供文、6 祈願文、7 結尾文」と記し、1 発端文の作文を試みている。

是の所（イスラエルのヘブライ大学）を蔽の斎庭と斎ひ定めて、神籬刺し立て招ぎ奉り座せ奉る、掛巻くも畏き産土大神・学問の大神・イスラエルの国世界を護り給ふ大神・神風の伊勢国は渡会の宇治の五十鈴の川上の下つ磐根に大宮柱太敷き立て、高天原に千木高知りて鎮まります
天照坐皇大御神の大御前を遥かにおろがみまつりて恐み恐みも白さく

この際に、御祭神としてイスラエルの神に奏上するのかどうか、伊勢の御神名を続けて最後に奏上するのは適切ではないと思案していたところ、スマートフォンにライブニュースが飛び込んで来た。日本とイスラエルの外務大臣が英語で共同ビデオメッセージを寄せ、日本語とヘブライ語の字幕付きで放送が始まるところであった²⁾。70年前の5月15日は、日本がイスラエルと外交関係を樹立した記念日であることを知ったのである。祝詞作文を中断し、ニュースを視聴した。そして、両外務大臣が述べる日本とイスラエルの友好と発展を願う言葉を聞いているうちに、イスラエルの神を祝詞で奏上する気持ちが固まってきた。

2019年のイスラエル訪問時には、伊勢神宮で頒布されている神棚と、外宮と内宮の御神札を用意し、あくまでも御祭神は伊勢神宮に限定した。今回は、最終的に三宅氏と相談したうえで、2度目の訪問であり、日本とイスラエルの外交関係樹立70周年という節目の年でもあることから、前回と同じく神宮の授与所で頒布されている神棚と、両宮の御神札を用意するのに加えて、イスラエルの神も祝詞に加えて奏上することにした。イスラエルの人々がこれを耳にした時、どのように受け止められるか予測ができない面もあったが、彼の地の神に礼節を尽くすことを第一義と考えた。祝詞の内容は、ヘブライ大学とコミュニティの繁栄に合わせ、日本とイスラエルの学術交流の進展、そして両国の外交関係樹立70周年を言祝ぎ、世界平和への祈りを中心とした。

儀礼のコンテキストは、前回と同様、宗教行事ではなく、日本文化の紹介として発信することにした。その経緯を述べておくと、2019年の渡航前、イスラエルに在住するユダヤ系アメリカ人の恩師から、「わざわざ日本の宗教儀礼を異国の人に向けてする意義がわかりかねます。日本大使館やイスラエル在住の

日本人に向けて行う儀礼をイスラエル人が見学するのならわかりますが」との疑問を投げかけられた。しかし海外では、日本人僧侶による声明の公演は珍しいことでなく、神道の祝詞奏上も同じコンテキストで考えていたので、この疑問の言葉がピンとこなかった。

ところが、テルアビブ大学側の受け入れ担当の教員から、ポスターを作成する際、「神道儀礼については、デモンストレーションという言葉を入れることが必要です。なぜならそれを宗教儀礼としてではなく文化紹介として行う点を明示しないといけませんから」と指摘され、ようやく状況が認識できた。つまり、一神教である三つの宗教の聖地があるイスラエルにおいて、異国の宗教文化の儀礼を行う際に、それを「宗教行事」とするのは、たとえアカデミアの場であっても緊張を生むものなのである。あくまでも文化としてのデモンストレーションとして、コンテキストを明確にすることが必須であった。

今回の神道儀礼も、ヘブライ大学はデモンストレーションという英語表現でポスターを作成することになった。慎重に宗教色を排除したつもりであったが、今度は日本の外務省から在イスラエル日本大使館を通じて、事業申請書の中の日本語の表現を変更するよう指導が入った。外務省がなぜ関与するのかといえば、ポスターに70周年の記念ロゴを使用する許可を得るため、在イスラエル日本大使館に事業申請を提出していたからである。提出書類には事業名と趣旨を記入するのだが、1箇所だけ「神事」と表現しているところが問題視され、修正が必要と判断された。提出先の担当者からは、神道を日本文化としてイスラエルにおいて発信すること自体には肯定的な言葉を得ていたのだが、外務省の指導により、「神事」を「行事」または「伝統」に変更してほしいと言われた。当方に異存はなく、「儀礼」は問題ないとのことであったので、そのまま使用し、「神事」を「行事」に変更し解決した。政教分離の観点から、問題視とされる恐れのある要素は排除する意向であったと推測する。出発までには無事ロゴの使用許可がおり、英語のポスターとチラシの作成に間に合った。

一般に民族音楽を学ぶ者が担う役割は、音楽を通して異なる文化の架け橋となる事業の企画や、ファシリテーターを務めることである。今回の事業は、祝詞奏上と祭祀舞を、あくまでも文化として体験をしてもらうことが主旨である。

ただし、デモンストレーションだからと言って、それは儀礼の真似事なのではなく、現職の神職が真剣に行う本物の儀礼である。見学者は本物の儀礼を見たいのであって、学者の解説だけでは、文化の「体験」は実現しない。外務省の意向に配慮し、一神教の聖地であることをも意識しつつ、「見学する側」イスラエルの人々と、「儀礼を行う側」神職の双方の立場を尊重しつつ、相互理解の実現を調整することが求められる。今回、その役割をどのくらい果たせたのだろうか。

3 現地における神道儀礼のデモンストレーションの実際

海外で神道儀礼のデモンストレーションを行う現場では、予想外のハプニングが起きる。それに対応するためには、神職側と主催者側との調整役を、臨機応変に務めなくてはならない。実際どのような局面に遭遇し、どう対応したのか、宗教文化に関わる文化交流で留意すべき点とは何かについて、(1)祭場の選定と設え、(2)儀礼への参加と見学の境界線、(3)ユダヤ教との比較、の3点に整理して記述する。

3-1 祭場の選定と設え

6月17日予定通りイスラエルに到着し、ヘブライ大学の宿舎にチェックインした。儀礼のデモンストレーションのため提案された場所は、人文学部ブルームフィールド図書館のエントランス近くのスペースであった。19日に下見をしたが、大学全体に多くの若者が溢れ、図書館のエントランスは人の出入りが多く、かなり大きな音が響く。「明日ここで行うのは難しいです」と、三宅氏から祭場の変更を相談するように頼まれた。19日に招聘側ニシム・オトマズギン学部長に相談したところ、19日は高校生など一般の大学訪問日で特に人の出入りが多かったが、20日は授業がなく騒音の問題はないだろうとのことであった。「ご希望であれば別の建物の静かな教室を使用することは可能です。しかし来る人が限られますし、図書館の方が多くの方が見られることでしょう」と言われ、三宅氏の承諾も得て、当初提案通りの場所で実施することにした。

20日当日の早朝、開始時刻の12時に先立ち、ブルームフィールド図書館のエ

ントランスに祭場空間を決め、テープのマーキング、神棚の設置、祓串や神饌、供物として皇學館大学のロゴ入りのグッズ（トートバッグ、クリアファイル、シャープペンシル）を置くテーブルの配置など、種々の準備を進めた。海外で祭場を整える際、先方との事前コミュニケーションが重要である。こちらが最低限何を必要とし、向こうがどこまで対応可能なのか、確認していたつもりであったが、現場対応しなくてはならないハプニングも生じた。

例を挙げると、神饌を置くテーブルに敷く白布を学生スタッフに依頼していたが、用意されたのは韓国研究プログラムのレセプションに前日使用されたテーブルクロスであった。何に使うのかをよく説明したうえで、頼むべきであった。急遽半紙を使って机上を覆った。また奉奠用の玉串は、榊がないため、前日許可を得て、大学の庭に植っているオリーブの木から小枝を取って用意していた。しかし、当日朝になって、予定よりも多くの教員と学生が来ることがわかった。日本研究プログラムの学生2名に、どの程度の小枝がよいか説明し、6本ほど採りに行ってもらい、麻苧と紙垂を付け多めに玉串を用意することができた。

予期せぬ問題とは逆に、思いもよらない嬉しい助力もあった。図書館を通りがかった日本人が、開始2時間前に声をかけてくれた。青木幹彦という名の留学生で、ヘブライ語が流暢なうえに、イスラエルの歴史や文化、ユダヤの伝統も知悉していた。聞けば1年でヘブライ語の大学の授業についていける語学レベルを習得し、ユダヤ民族史や安全保障を学んでいるという。「日本文化としての神道の紹介をしに来てくださってありがとうございます」と言われ、「ぜひお手伝いします」との申し出を受けた。スピーカーの設置や、祭場を区切る床へのテープ貼りのほか、図書館職員とのコミュニケーションをヘブライ語で円滑に取り計らうなど、実に強力な助っ人となった。異国で文化発信をする際には、双方の言語と文化に精通する人の協力が必要であることを痛感した。

3-2 儀礼への参加と見学の境界線

開始時刻の正午が近づき、学部長をはじめ、アジア研究学科長、日本研究の教員と学生たち、一般の見学者も参集した。およそ5メートル四方の祭場は、

神棚を設置した側にもずらりと観衆が立ち尽くした。日本では神前側に人々が立つことはないが、デモンストレーションというコンテキストであり、祭場の中に立ち入らない限り、見学者の立つ場所に制限は設けなかった。

祭りの規模は小祭式で、式次第は以下の通りである。

修祓 斎主一拝 御扉開扉 献饌 祝詞奏上 玉串奉奠 撤饌 斎主一拝
神酒拝戴 退下

英語による進行役を務めるにあたり、一つ迷いがあった。見学者にどの程度の儀礼参加を促すかである。具体的には、修祓の際の低頭と、玉串奉奠の2礼2拍手1礼である。その説明を予めしておくのか、説明した上で各自自由にと伝えるか思案したが、拝礼を促すニュアンスは避けたいことと、三宅氏とも学部長とも事前に打ち合わせをしていなかったため、説明は行わないこととし、斎主である神職の判断と、最初に行う学部長の所作を見て続く人の意思に委ねることにした。

開始時刻となり、関係者全員が揃い、学部長の挨拶の後、儀礼が始まった。三宅氏は鳳凰文様の紫の狩衣を着し、烏帽子をつけ、浅沓で登場した。修祓の祓詞を奏上し、祓串を取り供物を祓い、オトマズギン学部長に近づく。学部長は京都大学の大学院で博士号を取得され、数えきれないほど神社にも参拝されている。ここへブライ大学の祭場でも、みごとに美しい所作で低頭し、祓いを受け、続いて他の教員も低頭し祓いを受けた。御扉開扉では、神棚の扉に半紙を垂らし、斎主の警蹕が響く中、学部長がそれを取る形で開扉とした。献饌が終わり、祝詞奏上の間、私は頭を下げたが、見学者に「ご低頭ください」とは言わなかった。低頭こそしなかったが、見学者は全員、静かに聞き、特に教員の方々は興味深そうに耳を澄ましていた。

玉串奉奠になると、まず学部長が玉串を捧げ丁寧に2礼2拍手1礼を行った。アジア研究学科長と日本研究プログラムの教員も続いたが、初めてで戸惑いながら、三宅氏の筋を用いて玉串の方向を変える所作を見習いながら、玉串案に置いた。全員が2礼2拍手1礼を行った。次第がすべて無事に終わり、退下の

後、戻ってきた三宅氏と、教員、学生、一般の方々が順番に次々と写真撮影を始めた。直会に日本酒と、神饌として捧げたおかきなどを、自由にどうぞと声をかけたところ、日本のお菓子は一瞬にしてなくなった。大学のロゴ入りトートバッグ、クリアファイル、シャープペンシルも人気であった。多くの学生から、笑顔で“Thank you for coming to Israel.”と口々に声をかけられた。

1時間ほどのデモンストレーションは、好評のうちに終わったが、神棚の前で教員や学生代表が玉串奉奠の拝礼をすることを、宗教的に問題だと思っ人はいなかっただろうか。日本人留学生の青木さんによると、イスラエルには宗教色の強い大学とそうでない大学とがあり、ヘブライ大学は後者のセキユラーな大学なので、文化交流として神道儀礼を行うことや、参加するのは、全く問題ないとのことであった。確かに前日、東南アジアの上座部仏教の僧侶による仏教儀礼が別の場で行われていた。しかし図書館内には、ユダヤ教の信仰を実践していることを示すキツパを頭につけた学生も見かけ、配慮は必要であると思われた。今後、異なる文化に向け神道の体験重視型発信を行う際は、儀礼をただ傍観したまま終えるのか、あるいは修祓や玉串奉奠への参加を促したほうがよいのか、説明をしたうえで選んでもらうほうがよいのか、十分に検討をする必要がある。

3-3 ユダヤ教との比較

翌21日は、正午に行う人長舞の実演に向け、8時から会場準備を開始する。前日の儀礼と同じ場所で、日本から持参した5メートル四方の白布を清掃した床に広げ、周囲をテープで留め、土足厳禁の清浄な場を設けなくてはならない。強力な助っ人である青木さんは、朝から会場設置のために駆けつけ、またもや八面六臂の働きであった。まず白布を敷く前に、モップを見つけて来て、床を丁寧に磨いてくれた。ところが、白布を敷いた後に、何も知らない通りすがりの人が土足で上を歩いて靴跡がついてしまった。慌ててアルコール除菌シートで拭き、ようやくきれいになった。同様の事故を防ぐため、青木さんはゲスト・レクチャーに出席せず、誰も白布を汚さないよう見張り役を務めてくれた。

正午近くになり、集まったヘブライ大学の教職員と学生、一般の見学者が幾

重にも祭場を囲み、興味津々の表情で舞が始まるのを待っていた。時刻が近づき、舞人の神職の楽屋となっている図書館内のセミナー室へ向かう。舞人の装束は、通常よりも裾を長くした明衣に、垂纓の冠であり、右手に輪櫛をもち、実に清らかである。長い裾を持ちながら、祭場へと向かう舞人の歩くスピードに合わせて進む。舞人は白布の手前で浅沓を脱いで上がり、私は手前で立ち止まり、裾を長く美しく垂れるようにしてから手を離れた。神楽歌「其駒」が響き渡り、優美な人長舞が披露される。見学者は誰一人喋ることなく、食い入るように見つめていた。図書館のエントランスに荘厳な時空が現出し、舞が終わり、退下の後、装束のまま輪櫛を携えた三宅氏との撮影が続いたが、全員白布の上に靴を脱いであがっていたのが印象的だった。

イスラエル人の学生にとって、人長舞とその装束はインパクトがあったようで、青木さんはヘブライ語で学生から色々と質問されたそうである。一例を挙げると、「ユダヤの伝統的祭祀者のコーヘンは大きく重々しい白い装束を身につけ、舞の装束に酷似していますが、両者に直接的な繋がりがありますか」。それに対して青木さんは、「両者に直接的なつながりはありません」と答えた。文化伝播主義というよりも、長い歴史を持つ伝統文化は、異なる土地にあっても、同じような形式に辿り着くとの見解である。ここで学んだのは、異文化を体験する側は、そのプロセスで自身の文化と比較し、相似した例を想起することがあるということ。質問された際、発信側が双方の文化に精通していれば、相似性と相違性とを区別できるので、誤解や摩擦を避け、正しい理解を助けることができるだろう。一方で、相手が比較する場合はよいが、一神教のユダヤ教とは神観念が異なる神道を、こちら側から安易に比較するのは、疑問を呈する人もいるので、十分慎重になる必要がある。いずれにしても、ユダヤ教の伝統について、ある程度基礎的な知見を持つておくことは必須である。

4 ゲスト・レクチャーと質疑応答

21日の午前中は人長舞の実演に先立ち、ブルームフィールド図書館のセミナー室において、英語によるゲスト・レクチャーを行った。日本研究プログラムの学生と教員が出席し、前日の神道儀礼についての質問にも答えるために、

三宅氏にも出席してもらった。英語のタイトルは、“Changing to Stay the Same: Ceremonies of Renewal at the Ise Shrine and the Imperial Court”（変わらないために変えるということ—神宮式年遷宮と大礼—）とした。

4-1 ゲスト・レクチャーの概略

大礼と神宮式年遷宮から日本文化の特徴を捉えることを目的に、3つの問いを立てて進めた。(1) 天皇の古代からの役割は何か、(2) その天皇の役割は神宮と宮中の祭祀でどのように顕現されているのか、(3) 大礼と神宮式年遷宮の今日の日本人にとっての重要性とは何か。

まず(1)について、舒明天皇の万葉集の国見の歌「大和には群山あれどとりよるふ天の香具山登りたち国見をすれば国原は煙立ち立つ海原は鷗立ち立つ美し国ぞ蜻蛉島大和の国は」(巻1の2番歌)を取り上げた³⁾。国見儀礼は、土地を治める統治者が春に小高い山に登って支配地を眺めるという設定で、豊かな民の生活と秋の実りを寿ぎ、願わしい未来を先取りにしようという言霊思想に基づく予祝儀礼である。舒明天皇の御代から、天皇の公務の中心は、国と民の安寧と五穀豊穡を祈ることであったことが確認できる。

次に(2)について、伝統の創出論、祭祀学、民族音楽学の視点から話した。伝統の創出論は欧米の神道研究者の政治化された神道観である。ジョン・グリーンとマーク・テーウェンは2009年に出版された *A New History of Shinto* の中で、神道の継続性を否定し、大嘗祭を伝統の創出事例に取り上げている⁴⁾。その政治化された神道観の見直しを検討するために、祭祀学が有効である。國學院大学名誉教授の岡田莊司氏は『大嘗祭と古代の祭祀』において、神宮の祭祀と朝廷の祭祀との間には一体性があると指摘している⁵⁾。年中行事の長期的に継続している重要な祭祀として、神宮の神嘗祭と宮中の新嘗祭とが対応関係にあり、更に一定期間毎に行われる神宮式年遷宮と大嘗祭とが対応関係にあり、そこに祭祀の一体性が確認できる。その本義は、天皇は皇祖神を祀り、天下泰平と五穀豊穡を祈る祭主であり、祭祀は稲作を中心にした饗膳儀礼であることである。この本義は、民族音楽学の観点からも看取できる。古代歌謡の奥秘である神楽秘曲は、室町時代から讓位や即位礼後の御代始御神楽の儀において特

別に微音で奏楽され、皇位継承儀礼に結びつき、現代に至るまで途切れることなく継続されている。令和の大礼でも、即位礼後一日御神楽の儀で奏楽された。神宮には、明治22年の式年遷宮に御神楽と神楽秘曲が導入され、それ以来平成25年第62回式年遷宮に至るまで奏楽されてきた。宮中と神宮において、神楽秘曲の構造・役割・意義、そして奏楽も譜面も公開されない秘蔵性は、現在にいたるも保持されている。

(3)については、令和4年「新年宮中歌会始の儀」における御製からアプローチした。「世界との行き来難かる世はつづき窓開く日を偏に願ふ」。宮内庁の公式サイトに示される解釈は次の通りである。「このコロナ禍が収束したその先に、今大きく落ち込んでいる世界との人々の往来が再び盛んになる日の訪れを願われるお気持ちをお詠みになりました」⁶⁾。7世紀の舒明天皇の国見の歌に確認した天皇の公務の中心は、今も変わらない。

最後に人長舞について、宮中の御神楽の儀と神宮式年遷宮の御神楽の儀で舞う祭祀舞であることを、江戸時代の図を見せながら伝えた。そして、前日のデモンストレーション後に、オトマズギン学部長が見学者に向けて神道儀礼と収穫祭の繋がりについて話されたこともあって、大礼と神宮式年遷宮における饗膳儀礼の共通性を再度申し述べて締め括った。

4-2 質疑応答

発表の後、質疑応答の時間を設けた。ある女子学生から、「神宮の研究に着手したきっかけは何ですか」と研究課題を見つけたことについて質問と、「神楽秘曲は本番に向けてどのように練習するのですか」との微音奏法をよく理解した質問があった。日本仏教の中世史専門の教員からは、「近代以前の荒木田家と渡会家が神宮の神楽にどう関わっていましたか」との質問が出された。一方、三宅氏へは、氏が神職であることから宗教に関する質問が続き、私が訳に苦労する場面もあった。イスラエルの大学で神職が学生と交流するのも珍しく、ここに記録しておく。

女子学生「神道儀礼のデモンストレーションでは、普段の人格と別の人格が立ち現れていました。ご自分でもその自覚がありますか」

三宅氏「うーん、どうかな、意識したことがないからなあ」

瓜田「(これに関しては返事らしい返事がなかったので介入) この後、三宅さんの祭祀舞の実演があるので、その時に私たちがどう感じるのか体験しましょう。」

男子学生「神道では八百万の神々がいるとされますが、イスラエルの spirit を感じましたか」

三宅氏「うーん、(少し考えた後、英語で答える) I'm feeling it.」

同学生「それは単数ですか、複数ですか。(Is it singular or plural?)」

三宅氏「複数です」

同学生「それは神聖ですか。(Is it divine?)」

学生が直球の質問をするので、驚いた。顔付きをうかがうと、学術的な関心というよりは、神職がどう感じているのかを心から知りたいという真剣さであった。三宅氏はどう応答するのだろうかかと窺っていると、日本語で迷いなく、キッパリとこう言った。

三宅氏「あなたも神です」

その瞬間、どう英訳すべきか緊張が走った。専門の通訳者ならどう訳すだろう。一神教の神の英語は、冠詞を付けずに大文字の God である。神職の言う「神」は、それを避けるべきことは誰にもわかる。アカデミアでは一般的に多神教の神の英訳には小文字の god ではなく deity を用いる傾向がある。神社本庁は Kami を普及する方向である。Kami を使うには、まず神道における神観念をある程度説明しなければ、相手に伝わらない。ヘブライ大学の学生は、信仰の有無や宗教的背景の相違があっても、イスラエルの大多数はユダヤ教徒である。大学のあるエルサレムには、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という一神教の聖地がある。「あなたも神です」の「神」を、どの英語表現であっても、直訳すれば誤解や当惑を生じさせる可能性があった。人長舞の開始時間が迫っており、わずか数秒でこれだけのことを思い巡らして、「あなたも神です」をこう訳した。

「You are sacred (あなたは神聖なる存在です)」

その学生は神職にすかさず言った。

「You, too (あなたもです)」

その瞬間、セミナー室内は皆が腑に落ちた空気感に包まれた。前日の神道儀礼のデモンストレーションを体験したからこそ出てくる質問ばかりであった。三宅氏には大変なご苦勞をおかけしたが、オンライン会議では実現できない、人と人が直接交流するからこそ可能な文化体験が、ここにあった。

5 終わりに

6月22日の滞在最終日は、ヘブライ大学アジア研究学科の前期修了式があり、招待されて出席した。建物内には、第二次世界大戦中、リトアニアのカナウスで、迫害された6千人のユダヤ人にビザを発給し救出した外交官・杉原千畝の大きな写真が掲げられていた。その写真の下で、学部長と教員、学生たちと写真を撮った。帰国後、ニシム・オトマズギン学部長から英語のお礼状が届いた。

「日本・イスラエル外交関係樹立70周年に際し、用賀神社の三宅さんとともにヘブライ大学を訪問されたことは、素晴らしい出来事でした。多くの学生にとって、神道の儀式を自分の目で見て、あなたや三宅さんと英語と日本語で意見を交わせたのは、人生に一度の機会でした。私たち日本研究の教授は、学生に日本の歴史や言語を教えることはできますが、文化を直接見て『感じる』ことに代わるものはないので、感謝しています。その意味で、神道は日本を知るための優れた入り口であり、日本とその文化への関心を高める方法として役立っています。私たちはこのコラボレーションを継続したいと考えています。エルサレムで再び皆様をお迎えできることを楽しみにしております。」

最後に、学期中の海外出張を許可し、海外研修費を与えてくださった皇學館大学、出張中にサポートをいただいた現代日本社会学科の各位に、心より感謝を申し上げる。

註

- 1) アエラドット HP 「連載金閣寺を60回訪れたイスラエル人教授 “ニッポン学”：エルサレムに神道がやってきた」
<https://dot.asahi.com/dot/2019041200007.html?page=1> (令和4年11月22日閲覧)
- 2) 「日・イスラエル外交関係樹立70周年に際する両国外務大臣共同ビデオメッセージ」
<https://www.youtube.com/watch?v=TzU7cZjcHBo> (令和4年11月23日閲覧)
- 3) 英訳には、次の2冊を参照した。和歌研究の到達点から解説した、日英バイリンガル版のハルオ・シラネ編『世界へひらく和歌：言語共同体ジェンダー』(勉誠出版、平成24年), Alexander Vovin, *Man'yōshū : a new English translation containing the original text, kana transliteration, romanization, glossing and commentary*, Global Oriental, 2017.
- 4) 欧米の神道研究において、国家神道観が今も支配的である。その神道の政治化の問題点を伊勢神宮の祭祀の事例から考察した。Urita, Michiko. “Punitive Scholarship: Postwar Interpretations of Shinto and Ise Jingū.” *Common Knowledge* 21, no.3 (2015): 484-509.
- 5) 岡田荘司『大嘗祭と古代の祭祀』(吉川弘文館、平成31年)
- 6) 宮内庁 HP 「お題一覧 (昭和22年から)」 令和4年「窓」英文
<https://www.kunaicho.go.jp/culture/utakai/odai.html> (令和4年11月23日閲覧)

Promoting Cultural and Academic Exchange through Shinto: Report on Visit to the Hebrew University of Jerusalem, Israel

Michiko URITA

Abstract

In February 2020, COVID-19 spread to Japan, and the university suspended its faculty members from traveling abroad for more than two years. In June 2022, we visited Israel at the invitation of Dr. Nissim Otmazgin, Dean of the Faculty of Humanities at the Hebrew University of Jerusalem to deliver a guest lecture on the kagura secret song and to facilitate a Shinto ritual to celebrate the 70th anniversary of the establishment of diplomatic relations between Japan and Israel. The ritual was performed by Mr. Katsumasa Miyake, the chief priest of Yōga Shrine in Tokyo. The purpose of the event was to have the participants experience Shinto, which is at the core of Japanese culture, and to deepen mutual understanding between the two cultures.

This paper reports on what we encountered and how we responded when we demonstrated the Shinto ritual at the Hebrew University of Jerusalem, the holy city of the world's three major religions, and what we should keep in mind in cultural exchanges involving religious culture.

Keywords : The 70th anniversary of the establishment of diplomatic relations between Japan and the State of Israel in 2022, the Hebrew University of Jerusalem, Shinto ritual, Kagura secret song